



基本CG: 7枚



エツツンツン ツンツン ちな忍 修行者 行中と



- ・やりまくり正常位
- ・屋上で対面騎乗位
- ・水着で手コキ
- ・修行着で後背位
- ・胸寄せパイコキ
- ・メイド屈服フェラ
- ・影分身乱交

「何だ？……私の顔に何かついていているのか？」
顔を見ると睨み返して来た。
感じてる顔を見られるのが恥ずかしいらしい。
「勘違いするなよ！これはエッチじゃなくて修行！」

「……断じて恋人同士の甘い逢瀬ではない！」
必死な形相で訴える。
修行中ということが重要らしい。



「んあっ、あふう♡」
黙々と腰を振っている彼女も素直な反応になって来る。
また、気に障る行為をすれば、
心に南京錠をかけてしまうのだろうか。

「あぁっ、あぁあ……♡もうダメ……♡」
「また……っ……私も……っ……どうにかなってしまおう♡」
「なっとうの糸のようにねっとりとした本気汁がチンポにからみつく。」
「あぁっ、あぁあ……♡もうダメ……♡」



「イクぅううう~~~~♡……あ……んが♡」

これで何回目か。

大量の子種をイキまくってえづく彼女の腔内に注いでいく。

「……莫迦者……中に出していいなんて言った覚えはないぞ……」

イキ

イキ

イキ

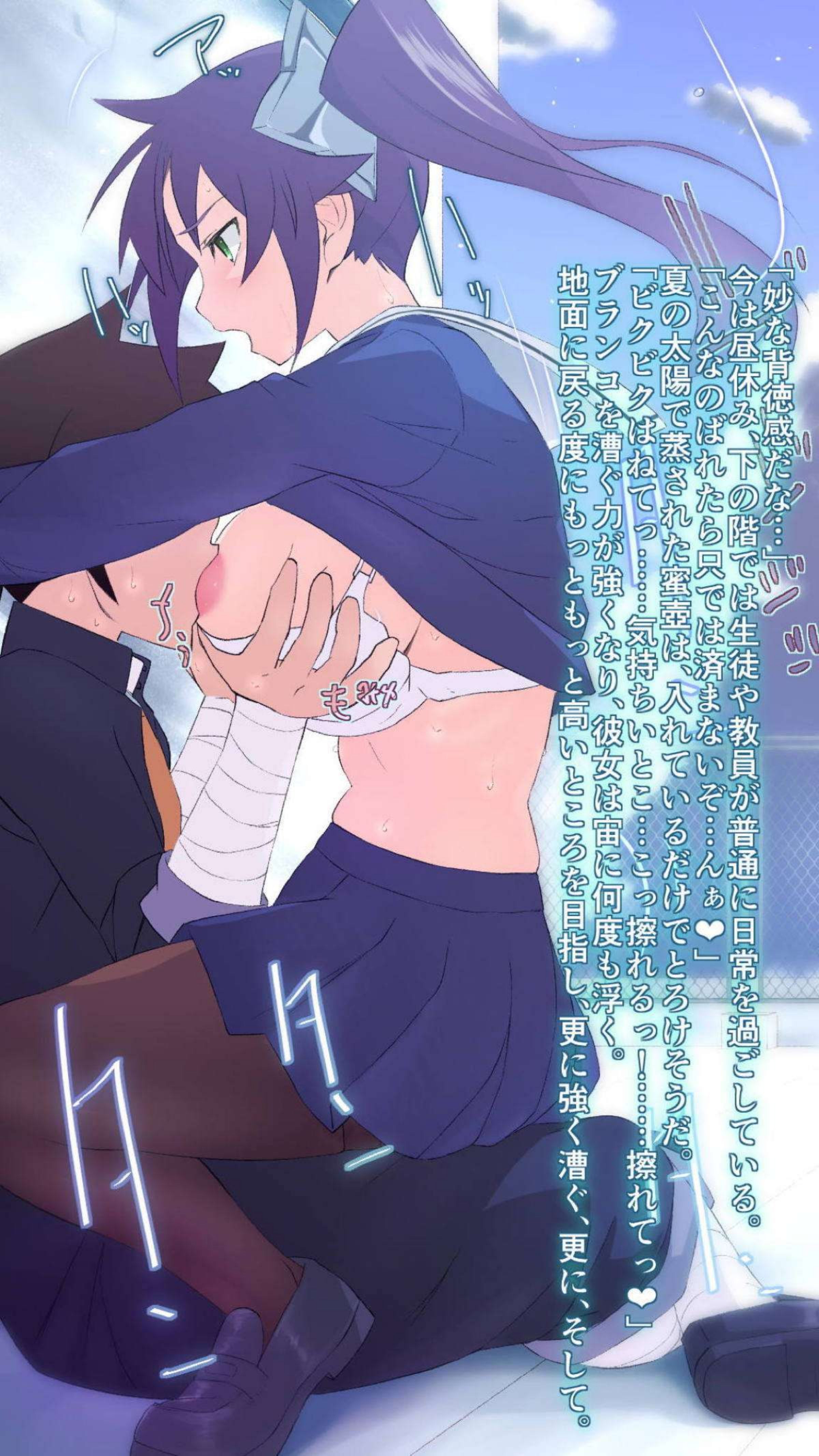
ユンタリのように柔らかくなること忘れたチンポが

腔内で脈打ち、射精を続けている。

「……き……気持ちよかったか？」

「……その……また修行をしたくなったら言ってくれ」

しれっと次の約束を取り付け、今日はもう終わることにした。



「妙な背徳感だな……」
今は昼休み、下の階では生徒や教員が普通に日常を過ごしている。
「こんなのばれたら只では済まないぞ……んあ♡」
夏の太陽で蒸された蜜壺は、入れているだけでとろけそうだ。
「ビクビクはねてっ………気持ちいいところ………こっつ擦れるっ………擦れてっ♡」
ブランコを漕ぐ力が強くなり、彼女は宙に何度も浮く。
地面に戻る度にもっともっとと高いところを目指し、更に強く漕ぐ、更に、そして。

「んぎいっ！……！」

日差しで灼けたコンクリより熱そうな精液が子宮に溜まっていく。
頭を抱き寄せ、自分の胸元に押し付けて来た。

「んふー！……んふうー！……んっ♡」

心臓が破れそうなほど鼓動している。

「熱い……！」

「……は、早く戻るぞ……もう少しで昼休みも終わってしまったう
顔を見ると、恥ずかしがって早々に切り上げられてしまった。」

おっぱい

んぎいっ

大胆な水着が恥ずかしがり屋の彼女を

少し大胆にさせたのか、
見せてと言ったら見せてくれた。

「どうだ……このスケベめ♡
人目がないからって普通言わないぞ

……しかもココもこんなにして……やれやれだな」

干

「よふん」

ネコの首の後ろを掴むように暴れるチンポが掴まれた。
「き……気持ちいいのか？ふんっ……刺激を与えられるなら
なんでもいいんじゃないのか？この暴れん坊は♡
……ほらっ、こうすればいいんだろ？
もうお前の気持ちよくなるのは全部知ってるぞ♡」

「ほら出た……ふふ射精した♡」
射精させたことに満足気だ。

「あまり出しすぎるとなよ……夜の楽しみが無くなる」
ごまかすように咳払いを一つ挟んだ。

びくっ！

ヤレ……ヤレ……

「じゃあ行くぞ……何うつけ者のような顔をしている
……海に来たんだから他にやれることがあるだろ！」
そう言っって手を引き、
しばらく夏の海を楽しんだのだった。

とんぱん

修行へ行く前。

リズムミカルに肉の打ち付ける音が室内に響く。

「あっ、あっ、あっ♡♡」

それと合わせて甲高い喘ぎ声を上げた。

「これも修行だからっ♡もっつと激しくしてもっ♡

……いいぞっ♡ああっ♡」

房中術の修行に付き合っているというこことを

思い出したかのように言った。

ぢゅん

ぢゅん

ぢゅん

ぢゅん

「ああっ♡くっ♡ダメだっ♡そこはっ……♡」
Gスポットなのか、そこを重点についでやると
露骨に反応がよくなった。
「んきゅううううっ！イク…イクイクイク…っ♡
イってしまいうううっ♡」

「ああっ♡……っっっ♡……あーっ……ううう♡」
腰が跳ね上がり膣のしまりが尋常じゃなくきつくなった。
耐えかねてチンポが勝手に射精をする。
「んっく……また子種を注がれてしまった……んっ」

ずるりと肉棒を引き抜くと、
スイッチが切り替わったように
いつもの凛々しい顔持ちに戻った。
「……では次は走る……勿論、お前も来い」
しかたなく10キロのマラソンに
付き合うことにした。



「これでいいのか変態」

「恥ずかしがつて胸を全部露出させないのが逆にエロく見えた。」

「わっ……みるみる大きいく……ぐっ早く済ませろ……！」

「……こんな耐えられないっ！」

ぐみぬ

おん

にゅ

「気が変わってしまいう前に、その魅惑の谷間へ肉棒を迷い込ませることにした。
く……こんなに恥ずかしいことだったなんて……」

「ぐっ……こんなものでも犯されてる感覚になるんだな……」
自分の胸を性器として使われることが落ち着かないらしい。
「好きに動け……遠慮はしなくていい」

幸せな圧力がチンポ全体を覆う。
形を保っているのが不思議なくらいの柔らかさだ。
「胸が大きいと邪な目で見られることが多いが……
お前を満足させられるなら悪くないのかもしれん」

ぬ

ぬ

ぬ

っ

っ

っ

普段の彼女は自分に厳しくて精進のため勇往邁進を怠らない、肉欲に溺れる人間とは無縁の存在だった。だが今はメイド服に身を包み、献身的に肉棒をしゃぶっている。

こうなる関係になるまで簡単ではなかった。だが今はある程度のことなら聞いてくれる。反抗的な目で責めて来る。こんなことをさせて覚えていると訴えている。



一通り訴えたいことを済ませたのか、仕方なくと言った感じで徐々に本腰を入れてしゃぶり始めた。熱の入り用から、彼女はもうチンポの虜だということも伝わってくる。清らかな自分を捨ててまで性欲に従順になったのは、チンポが与えてくれる快楽を知ってしまったからだった。

それに献身的に奉仕するのは、与えられたものを与え返すことで彼女自身が心置きなく快楽に溺れられるから。彼女は絶えず邪魔をする理性に葛藤しながらも、できる限り劣情をそそるようやしやぶった。

射精をすると、もう発情しきった雌そのものだった。
鼻の穴を広げ、精液の匂いを嗅いで表情を蕩けさせている。
肺いっぱいには精液の空気を溜め込んだ後、彼女は喉をならし精液を飲み込んでいく。

苦くて吐き出したいだろうに、眉間にシワを寄せて苦しそうにしながらも、
喜ぶと知っているからそうする。
尿道に残った精液も丁寧に吸い出し、丹念に金玉の裏側まで舐めて掃除をしてくれた。
彼女は「主人様」と悩ましげに呟いた。
メイドは彼女の新しい一面を開けたようで、これからも楽しめることがありそうだ。

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ



